
演題名 がん教育を受けた小児血縁者に対する
 インフォームド・アセントのタイミングを検討した症例

演者氏名 小田いつき
所属先 近畿大学 大学院医学研究科 医学系専攻

・筆頭著者・共著者の氏名

小田いつき 1)2)、菰池佳史 3)、池川敦子 2)4)、中村朱美 2)、西郷和真 2)4)、松尾幸憲 1)

・全著者の所属施設を記載

- 1)近畿大学 大学院医学研究科 医学系専攻
- 2)近畿大学病院 遺伝子診療部
- 3)近畿大学医学部 乳腺外科
- 4)近畿大学大学院総合理工学研究科理学専攻 遺伝カウンセラー養成課程

【背景】

近年、がん教育は拡大傾向にあり、平成 29・30 年度より小学校教育で開始されている。小学校教育では「がん」を通じて健康と命の大切さを育むことが目的とされ、中学・高校教育では科学的根拠に基づいた理解を深めることがねらいとされている。今回、学校におけるがん教育の拡大を背景に、小児血縁者に対するインフォームド・アセントの方法や遺伝情報の共有タイミングを検討した症例を経験したので報告する。

【症例】

クライアント(CL)は 45 歳、女性。若年性乳がんに罹患し、術式選択と遺伝情報精査、さらに自身の健康管理を目的に BRCA1/2 遺伝子検査を受検した。結果は *BRCA2* 陽性であり、HBOC の確定診断に至った。その後、乳腺外科での治療選択や婦人科での医療管理が行われた。子どもたちへの情報共有については「もう少し成長してから伝えたい」との希望で、遺伝カウンセリング(GC)は終了となった。

しかし後日、CL 夫婦から GC の予約があり、その理由として「中学生の娘の授業参観でがん教育が行われ、娘から『乳がんに遺伝が関係することはあるのか』と質問された」との経緯が語られた。CL はこの質問に驚き、再度来談して小児血縁者への情報提供について相談した。CL 夫婦は現時点で娘への告知には消極的であったが、「嘘はつきたくない」とも述べた。最終的に、娘から直接質問があった場合には、娘も同席のうえで再度 GC を受ける方針となった。

【結果】

がん教育の拡大により、小児血縁者が遺伝について考える機会は増加している。小児においても年齢により心理社会的および認知機能の発達段階は異なる。また、本症例のように「子どもに嘘をつかない医療」を実現するための議論も求められている。遺伝性疾患に関する情報共有の対象には小・中・高校生も含まれるため、教育内容や発達段階に応じたインフォームド・アセントの在り方について、今後さらに議論が必要であると考えられた。